

Newsletter

自治医科大学地域医療オープン・ラボ



Vol.85, Sep, 2014

社会人大学院を終えて

大阪赤十字病院 不整脈内科 (大阪 23 期卒) 佐野 文彦

このたび社会人大学院を卒業し、医学博士をいただきました。義務年限終了後に専門医研修もしたい、研究もしたいとの希望を持っておられる卒業生の方も多いのではないかと思えます。興味のある方は是非、社会人大学院制度を活用されることをお勧めします。

自治医大を卒業後は出身地の大阪にもどり、義務年限の前半は保健所勤務、後半は3次救命救急センターで仕事をさせていただきました。保健所勤務の際には、臨床から離れ不安もありましたが、医療行政に関わることも今後ないかもしれないとの思いで毎日を過ごしていました。

その後、大阪府南部の3次救命救急センターへ赴任いたしました。初期研修しか経験していない私の能力は、先方の希望のものと大きくかけ離れており、まったく使いものになりませんでした。それでも毎日遅くまで病院に居残り、少しでも多くの臨床経験を積むように心がけていたことを思い出します。

特に3次救命救急センター赴任時には、時間はあっという間に過ぎ、気づけば義務年限が終了となっていました。他府県の卒業生に比較してみると、自分の義務年限内の仕事は特殊なものではありましたが、保健行政と救命救急の2つのいいところを経験できた恵まれたものであったと思います。

このころはまだ自身には研究にかける精神的な余裕はありませんでした。義務年限があけたあとは、学生時代から興味があった循環器内科にすすみました。循環器の領域では、EBMが盛んであり、学会ホームページでは数多くのガイドラインが並んでいます。学会での講演を聞いても、論文を読んでも、疫学的知識がなく、その論文が何をいつているのか、どのように読んで理解すればいいのか、ましてや自分で研究するにはどうすればいいのか全く分からない状態でした。

循環器内科の専門研修を始めたばかりで臨床から離れるのは難しい、しかし疫学研究もしてみたい、また学位をとるなら母校でとりたいといろんな思いがあり、悩む日々が続いていました。悩みがあれば自治医大へ相談してみようと、大学院係、オープンラボの亀崎先生に相談してみました。



臨床をしながら、社会人大学院・学外講師制度を用い、大阪で指導を受けながら研究が可能と
のことでした。私の悩みはすぐに解消されました。自治医大循環器内科の荻尾先生、オープン
ラボの亀崎先生、大阪大学公衆衛生学の磯先生・大平先生（大平先生は保健所勤務時代にお世
話になった指導医で、循環器疫学の専門家でした）に許可をいただき、話はあっという間にま
とまりました。循環器内科での専門研修を続けながら、自治医大社会人大学院、大阪大学連携
大学院に所属し、循環器疫学研究を始めることになりました。

社会人で病院勤務をこなしながら（さらに新しく専門研修を始めるならなおさらですが）研
究を行うことは精神的に非常にしんどい時期となると思います。やる気だけはあったつもりで
すが、循環器病院での毎日の研修を終えることに精いっぱい、大学院の前半2年間はほとん
ど研究らしいことはできない状態でした。循環器臨床にもようやく慣れてきたころです。大学
院に入ったのに研究どころか、疫学の基礎知識すら習得できていないことに強い焦りを感じま
した。疫学関係の本を読みあさり、大阪大学の指導医の研究グループの論文を読みました。指
導医が執筆した論文ですから、どのように対象を選んだのか、なぜこの解析方法なのか、結果
の解釈はどうしたのか、などこと細かく質問することができ、疫学的知識の強化ができた
た。お世話になった研究グループは、全国4か所の地区で30年以上にわたり地域住民健診を行
い、そのデータから虚血性心疾患、脳卒中のリスク因子を同定し、予防にいかす活動を続けて
いました。私も大学院生として、各地の住民健診に参加し、持ち帰ったデータを教室で解析す
るということをやっていました。

私は、循環器のなかでも心房細動に興味をもち、心房細動の発症リスク因子の解析をおこな
い、新規発症を減らすことを目的とした疫学研究を行いました。時間はかかる割に前には一向
に進まず、焦る日々でしたが、今週はここまでやって、これとこれができなかったというよう
に指導医のもとにデータを持って行っては修正を繰り返していました。学外講師制度を利用さ
せていただいたので、指導医とのアPOINTは比較的容易であったと思います。夜になって教
室を訪れ指導をもらってまた次回の約束をする。そんな1年を送りました。

また半年に1回、研究成果報告会に出席するため自治医大に足を運びました。いつも荻尾先
生からはお食事に誘っていただき、現在の研究成果報告とともに、臨床病院での勤務で困っ
ていることはないかなど、細かいサポートをいただきました。

大学院3年生の1年で、テーマであった日本人における心房細動発症のリスク因子の解析結
果をだし、国内外の学会にて発表を行いました。4年生のはじめから、土日を中心に論文の執
筆活動を行いました。これについても、指導教官との密なやりとりを行い、投稿までに10回ほ
ど原稿修正したことを覚えています。論文投稿からもさまざまな苦労があったように記憶して
おりますが、学位審査締め切りまでに論文アクセプトを無事に得ることができました。

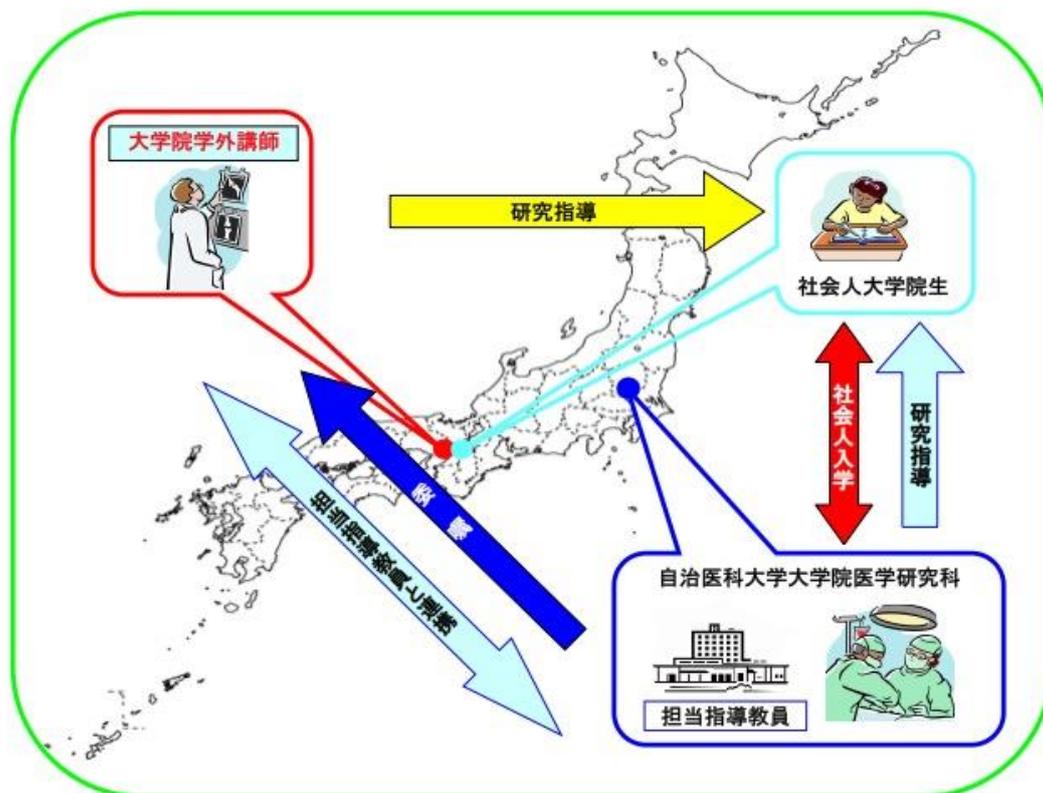
大学院卒業式・学位授与式では、自治医大の循環器内科学教室から心のこもったお祝いのこ
とばをいただき、大阪大学公衆衛生学教室からは社会人を続けながらもよくがんばったとお褒
めのことばもいただきました。この4年間をおえ、研究者としてもようやくスタートラインに
立つことができました。

臨床医として、また研究者として仕事を継続していくことこそ、自治医大・大阪大学に対する恩返しになるかなと思い、気を引き締めているところです。

忙しく、はらはらした4年間でしたが、過ぎてみれば充実した楽しい時間でした。

皆さんもチャンスがあれば、是非とも同じような体験をして、自分自身もさらなる飛躍をしていただければと思います。困ったときには自治医大は必ず大きなサポートをしてくれます。

最後になりましたが、研究を指導いただきました自治医大の苅尾先生、大阪大学の磯先生・大平先生、オープンラボの亀崎先生、多くのお世話になった皆様に感謝いたします。



自治医科大学社会人大学院制度

！！地域医療オープン・ラボNews Letter原稿募集！！

地域医療オープン・ラボでは、自治医大の教員や卒業生の研究活動を学内外へ発信するために、「自治医科大学地域医療オープン・ラボNews Letter」を定期的に発行しています。

<http://www.jichi.ac.jp/openlab/newsletter/newsletter.html>

- ☆ 自治医大の教員や卒業生の研究活動をご紹介ください
- ☆ 自薦・他薦を問いません
- ☆ 連絡先：地域医療オープン・ラボ openlabo@jichi.ac.jp